

# ミルティーがくれたコンパス

芦沢美樹 / 作・絵



## 第 26 回 日本動物児童文学賞奨励賞受賞作

まわりに物や情報があふれすぎて、逆に進路を見失いそうになったことはありませんか？ そんなあなたにミルティーが優しくそして厳しく、生き方の道しるべを教えてください。

ミルティーがくれたコンパス

「やっぱ来るんじゃないかったな」

大海原に向かつてぼやいた。清水港を出航して一週間になる。船旅は頭がふやけそうなほど退屈な上、うつとうしい母さんと一緒だ。船酔い以上にめまいがしそうだ。すぐにでも家に帰りたい。

「ブルーオーシャン号はベーリング海峡を抜けて北極圏に入りました。現在ロシアの北東チュクチ海沖を航行中です」

船内アナウンスが告げる。じいちゃんの会社が企画した記念クルーズの最中だった。水平線上に目的地のウランゲリ島がうつすら見えてきた。厳しい気候にもかかわらず多様な動物がいて、特にホッキョクグマの繁殖地としては有名だ。世界遺産にも登録されている。夏の間はこの海域の氷が解けて、船の運行が可能になり上陸もできる。

この季節は白夜で一日中太陽が沈まない。ギラギラ照り続ける日差しのおかげで、甲板にいても思ったより寒くない。風も穏やかで、海は巨大なビニールシートを敷いたように静かだ。

「ピチ、コチ、ガガ」

突然船底の方から音がした。

「冰山にぶつかったのかもしれない」

豪華客船が沈没する映画を出発前に三回も見ただけは、とっさに身を伏せた。体が小刻みに震える。たとえ船体に穴が開いたとしても、沈没までには少し時間があるはずだ。

「ラ、ライフジャケット、それと救命ボートはどこだ」

確認しようにも、腰が抜けて立つことができない。腹ばいになってようやく甲板の端まで移動した。顔を出しておそるおそる船体の横をのぞき込む。

「カチ、ピキ、パコ」

またしても海面から不気味な音が聞こえた。一瞬目をつぶったものの「いちにのさん」で真下を見る。音の正体がわかった。なんてことはない小さな浮氷だった。浮き輪ぐらいの大きさしかなく、それもたった三つだけ。頼りなげにプカプカ浮いている。

ほっとしたと言うよりも、なんだかばからしくなった。あきれながら立ち上がろうとしたときだ。ズボンのポケットからスマホが落ちた。ここではつながらないのがわかっていても、常に携帯していないと落ち着かない。

「ああよかった、手すりに引っかかっている」

危うく海に落とすところだった。再び手すりから体を乗り出して手を伸ばす。あと五センチで届くというときだった。今度は本当に信じられないことが起きた。こともあろうに、ぼくはまっさかさまに海へ

落ちて行つた。

ぼくがしぶしぶこのツアーに参加したのは、じいちゃんに強くすすめられたからだ。

「海斗、かいとこれからは北極海が熱いぞ。豊富な資源が埋まっている。地球温暖化で航路が広がれば、どんどんビジネスが増える。お前も来年は中学一年生だ。青井海運の跡継ぎとして、早くからこの海域に通じていた方がいい」

さすがに考えることに抜け目がない。じいちゃんは一代で「青井海運」を急成長させた。たくさんの船を所有し、静岡県の清水港を拠点に海上輸送はもちろん、観光業まで手がけている。従業員も大勢いて、県内有数の大企業だ。

おかげでぼくは産まれたときから、この港町で何不自由ない生活をしている。大きな家にお手伝いさん、高級車に専属の運転手さん、そして欲しいものは何だって買ってもらえた。

と言いたいところだけれど最後は違う。両親はぼくにぜいたくをさせることを嫌った。特に母さんのうるささと言ったらなかった。じいちゃんがぼくに高価なものを買い与えると、鬼のような顔をしてじいちゃんにかみついた。

「父さん、海斗をあんまり甘やかせないで下さいって言ったじゃないですか！」

母さんはじいちゃんがすすめた見合い話を断って、船乗りの父さんと結婚した。強くておおらか、そして優しいところにひかれたのだと言う。ぼくの名前もそんな両親の願いが強く込められている。海のように広くて強い心を持ち、北斗七星のように明るくきらめく人間になっ

て欲しかったそうだ。

ところが残念ながら逆方向に成長してしまった。気が弱くて神経質、やせっぽちで体も弱い。たくましさとは無縁だ。でも好きでこうなつたわけではない。それには小学四年生のときに起きた、ある事件が大きく関係している。

その日は父さんが三カ月ぶりに航海から戻った。母さんは夕食に父さんの好きなカレーを作った。

「今日はブルーベリーカレーに挑戦してみたわ。ママのアイデアよ」  
おそるおそる口にした。辛いカレーに甘酸っぱさが効いて案外おいしい。結局ペロつと三皿もたいらげた。最後にミルクティーで締めくくったときには、おなかかはちきれそうだった。

次の日、二時間目の授業が始まってまもなくだった。突然おなか

キュルルと鳴ったかと思ったら、猛烈に痛み出した。冷汗が出てくる。休み時間まで我慢できずに手をあげた。先生に許可をもらうと、急いでトイレに駆け込んだ。

用を済ませるとおなかの痛みは消えた。やれやれと思いながら教室に戻る。ところが静かに入ろうと、変に力んだのがいけなかった。教室の扉を開けたとき、思わずおならをしてしまった。

誰かが小声で「青井海運コ、クサッ」とささやいた。教室中からクスス笑いがもれる。顔中から血の気が引いていくのがわかった。いきなり泥沼に突き落とされた感じだ。その日はまともに顔を上げることもできなかった。

それ以来学校に行くのが苦痛になった。また授業中におなか痛くなったら、と思うとぞつとした。ぼくは危険なことからことん逃げ

ようと決めた。

まずは食べ物に関してだ。食事の量を減らしたのは言うまでもない。ブルーベリーと聞いただけで気分が悪くなるくらいだ。ジャムであれお菓子であれ、ベリーと名のつくものはいっさい口にしなくなった。生ものもやめた、好物だった寿司でさえもだ。給食は栄養成分を調べてから食べるようにした。

そのほか身のまわりの細かいことも、儀式のようにしつこくチェックをするようになった。手洗いは一日二十回以上、消臭スプレーや除菌ティッシュは常に携帯した。とにかく不潔なものが許せなかった。食べ物を触った手で平気でノートをめくるやつを見ると、腹が立った。たとえば家族のものであっても、同じ皿や箸を使うのは汚いと思った。

そうした習慣は時間と共にエスカレートし、気づいたときには自分でもコントロールできなくなっていた。細かいことが気になって、い

つもイライラする。そんな態度はまわりを遠ざけた。体をピリピリした膜が覆って、みんなと一緒の空気を吸うことができない。普通のことを普通に楽しめない。ぼくは友達から孤立した。

明るかった母さんの笑顔も消えていった。そしてこれまで以上にぼくに厳しくなった。

「もつと外に出て体を動かさなさい。あまりばい菌に触れない生活をしていると、免疫が落ちて弱い菌にも負けるわよ」

そんなことを言われるたびに激怒した。

「うるさいなあ、元はと言えば母さんが変なカレーを作ったせいだろ！」  
ぼくは心に根づいてしまった不安と恐怖、そして抑えようのないイライラを、母さんに当り散らすことで解消しようとしていた。

春先のことだった。庭で花壇の手入れをしていた母さんが、がっかりした顔で家の中に入ってきた。

「植え替えたばかりのパンジーが枯れてしまったわ。きつと肥料を入れ過ぎたのね。栄養を与え過ぎて、根元から弱らせたんだわ」

それを聞いた途端、猛烈に腹が立った。

「それぼくに対する嫌味かよ！」

そう言い放ったあと、思わず家を飛び出した。本当は自分自身に嫌気がさしていた。涙がこぼれ落ちるのを、何度も袖でぬぐった。

あてもなく歩いていたら港に着いた。防波堤に同じクラスの平太がいるのを見つけた。本名は平木雄太、誰かが「何があっても平気の雄太」と言ってから、平太と呼ばれている。虫歯だらけの歯や、いつも同じ服を着ていることをからかわれても全然気にしない。それどころか、わざとおならをしたりして笑いを取る。明るくてクラスの人気者だ。でも一人海岸にたたずむ平太は、普段の雰囲気とは違った。もの悲し

げで大人びて見えた。

振り返った平太がぼくに気づいた。

「あつ、青井君。珍しいところで会ったね」

一瞬驚いたような顔をしたけれど、すぐにニタつと微笑み返した。  
いつもの平太だ。

「ここで何してんの？ 何かおもしろいものでもある」

「うん、あの海麒麟。ここからだと一番かつこよく見えるんだ」

平太は巨大なクレーンを指差した。コンテナ船の荷物を積み下ろし  
するためのものだ。

「えっ、海麒麟ってあのガントリークレーンのこと？」

「そう。麒麟の恐竜みたいだろ」

確かに鉄骨でできた麒麟みたいだ。コンテナを引き上げるときは、  
長い首が直角に下がる。そのときも麒麟がおじぎをしているかのよ

うに見える。

「ほんとだ、そう言われてみればそっくりだ」

「死んだ父さん、あのクレーンの操縦をしてたんだ」

「……ああそうか。じゃここは特等席だね、目の前に見える」

「うん、母さんもキリンのそばにいますと、父さんが守ってくれてる気がするって。雨でも雷でも絶対あそこを離れないしね」

平太の家は母子家庭で、お母さんは港の食堂で働いている。平太が背負うさまざまな事情が、先ほどの表情をさせたのかもしれない。ぼくは急にある質問をしたくなった。

「なぜ平太はいつも明るくいられるんだ」

「へへ、おれそんなにいつもニヤけてるかなあ」

「よく笑ってんじゃん」

「そっか、俺すげえつままないことでも大喜びするからな。給食の残り

をもらうと、生きていて良かったって本気で思うし。だから笑う回数  
が人より多いんじゃないのか」

その何気ない一言が、ぼくの重い心を揺さぶった。平太の心の持ち  
方が、明るさだけでなく強さや優しさも生んでいるのだと思った。

「あつそろそろ帰らなくちゃ。母さん夜も食堂だから、夕飯を作るのは  
ぼくの役目なんだ」

そう言つて去る平太は、本当に大人びていた。恥ずかしさを覚えな  
がら、ぼくはとぼとぼと家に戻った。

その晩外洋から戻っていた父さんに、珍しく自分から話しかけた。

「ねえ父さん、母さんはぼくのこと嫌いだよね」

「なんだ突然、母さんはいつだつてお前のことを一番心配してる」

「でももつと強い子が欲しかったんでしょ」

「誰だって最初は弱虫さ。いろんな経験を積んでだんだん強くなる。あの母さんだって、昔はもつと臆病で神経質だったんだぞ」

「へえ、信じられないな。変わったのは父さんの影響？」

「ははっ、どうかな。母さんは青井海運の一人娘として、とても大事に育てられた。でも思い切って温室の外に出たんだ。自分を敢えて風雨にさらすことで、強くなっていた」

「ふうん……ぼくもいつかは強くなれるのかな」

「安心しろ。磁石には正反対のN極とS極があるだろ。人間の心も同じだ。弱さと強さが常に同居している」

「でもときどき、自分がどうしたいのかもわからなくなるんだ」

「いいか、船はコンパスを使って進路を取るよな。人間の心の中にもコンパスがあると思うんだ。心の持ち方次第で狂うこともあるだろう。でも自分を信じていれば、あとは自然の力が正しい方向に導いてくれ

るはずだ」

ぼくのコンパスは狂いっぱなしだ。父さんの話を聞いても、とても自分が変われるとは思えなかった。

梅雨明けと共にうだるような暑さがやってきた。休み時間になると、夏休みの話であちこち盛り上がる。でもぼくはこの暑い中、どこかへ出かけたいとは思わなかった。エアコンの効いた自分の部屋で充分だ。パソコンとゲームがあれば何日間だって過ごせる。

そう思っていた矢先だった。母さんがこんな話を持ちかけてきた。

「おじいさまの会社が客船を買ったのは知ってるわよね。今度初航海を祝って記念クルーズをすることになったわ」

「ブルーオーシャン号でしょ、で？」

「ロシアの北にあるウランゲリ島っていう無人島に行くの」

突飛なことが好きなじいちゃんが、いかにも考えそうなことだ。

「そんなへんぴなところに行きたい人なんているの？」

「今じゃ世界中どこでも簡単に行けるでしょ。だからなおさらそういう秘境が人気なのよ。海斗も行きたいでしょ」

じいちゃんに頼まれたのだろう。母さんはぼくを乗り気にさせようと必死だ。

「興味ないよ。だからもうその話やめてくれる」

ぶっきらぼうに断って、自分の部屋に戻った。ところが次の日、じいちゃんが直接ぼくを説得しに来た。よほど北極海に連れて行きたいらしい。大体跡継ぎの話からして、じいちゃんが勝手に言っていることで、本当はいい迷惑だった。でもかわいがってくれるじいちゃんには弱い。結局嫌とは言えなかった。

七月二十五日、ぼくらを乗せたブルーオーシャン号は、大勢の人に  
見送られて華々しく清水港を出航した。客船は「洋上のホテル」と呼  
ばれるだけあって、レストラン、店、映画館、プールなどいろいろな  
施設がある。

航海中はさまざまな催しものが用意されていた。普段は立ち入り禁  
止のブリッジ見学、海や船について学ぶ洋上研修、鳥や星座の観察会  
もあつた。それ以外にもイルカの群れや夕陽など、甲板から見る景色  
に乗船客は大喜びだった。

ところがぼくはこれらのことにすぐ飽きてしまった。インターネッ  
トで見たことがあるものばかりだ。暇をもてあましたまま、船室にこ  
もることが多くなった。失敗したのは、家から気に入ったDVDを持っ  
てくるのを忘れたことだ。そのせいで備えつけの宣伝用DVDを、何  
度も見る羽目になった。その名も「極北の楽園ウランゲリ島」、おかげ

でこの島にすっかり詳しくなっていました。

母さんが祝賀パーティーの接待から戻ってきた。

「あら、また閉じこもり。ここでしかできないことをもつと楽しんだらどう？」

いちいちうるさくてうんざりする。聞こえない振りをして、DVDを見続けた。

## 二

どれくらいの時間が経ったのだろう。ゆりかごに乗った夢を見た。目覚めるとぼくは小さな浮氷の上にいた。まわりは三百六十度海だ。どうしてこんなところにいるのかわからない。目を閉じると、次第に

自分の身に起きたことが脳裏によみがえってきた。

「そうか、ぼくはスマホを拾おうとして船から落ちたんだ」

はっと胸や手足を見る。氷の上に落ちたにしては、痛みもなければ血も出ていない。やはり海水に落ちたのだろう。照りつける太陽がぬれた服を乾かしている。でも氷に這い上がった記憶がない。

目の前にウランゲリ島が見えた。甲板で見たときよりもずっと接近している。ブルーオーシャン号も近くにいます。一刻でも早く発見されることを祈った。

そんなとき奇妙なことに気がついた。海は穏やかで風もない。それなのにこの氷は、ヨットのような速さで島に向かっていている。まさかモーターがついているわけでもないだろう。不審に思いながら後ろを振り返って、一瞬目を疑った。氷の淵で黒い目玉をギラつかせた動物が顔を出していた。フウフウと鼻息をかけながら、こちらをじっと見つめる。

ホツキヨクグマだ。ぼくは再び気絶した。

カーカーというけたたましい鳴き声で目が覚めた。鳥が黒い花吹雪のように宙を舞っている。突然何かに視界をさえぎられた。同時に顔をぬちゃつとした生暖かいものが触れる。声も出なかった。先ほどのホツキヨクグマが、ぼくの顔をなめていた。

嫌でも察しがついた。海で見つけたごちそうを海岸に運び、これからゆっくり味わうのだと。鋭い牙でかぶりつかれて血みどろなり、痛みと悲鳴の中でぼくは息絶える。おぼれて死んだ方がはるかにましだった。

「頼むから一氣に殺してくれ。じわじわ食うのだけはやめてくれ」

観念して最後を待った。ところがいつまでたっても襲ってこない。相変わらず暖かい息をかけながら、ぼくをなめ続ける。

しばらくすると立ち上がって、ぼくの体の五倍ぐらいある体をブルンブルンと振るわせた。そしてぼくの上着の端をくわえると、そのまま引きずって歩き出した。

「ここじゃ誰かに横取りされそうで嫌なのか？」

今さら抵抗しても無駄だ。ぼくも立ち上がって、一緒に砂浜を歩き始めた。

島は氷河や氷山もなく、岩がむき出しになっていた。断崖にはおびただしい数のカラスがたむろしている。ホッキョクグマはその崖を登り始めた。いちいち振り返るので、ついて行くしかなかった。急斜面は登るのがやっとで、へたばりそうになる。

しばらく行くと谷間のようなところに出た。ホッキョクグマは後ろ足で立ち上がって、用心深そうに周囲をうかがった。そして岩場の一角をクンクンとかぎ始めた。見るとそこに洞窟の入口がある。と思っ

たらいきなりその中に押し込まれた。

中は暗くて獣の臭いがした。目が慣れてくると様子が少しわかった。思ったより広い。住処なのか、海草や木の実の食べかすがたくさん落ちている。ホツキヨクグマが出口をふさぐような格好で腰を下ろした。こうしてぼくはこの洞窟に閉じ込められた。

「これは夢だ。朝になればこいつも臭い穴も何もかも消える。もう少しのがまんだ」

しかし朝になっても、悪夢は何一つ消えていなかった。と言っても太陽は一日中沈まないから、朝も何もない。出口から入り込む強い光が、現実を映し続けていた。目の前にはグーグー寝息をたてた巨体がいる。「こいつシロクマのくせして、汚れてミルクティーみたいな色だ」

やぶれかぶれにこのホツキヨクグマに「ミルクティー」という名前をつけた。

外の様子を知りたくなった。もしかしたらヘリコプターが搜索しているかも知れない。そつと出口をのぞこうとしたら、ミルティーが目覚ました。ウーとうなると、大きな手でぼくを岩壁に押しつけた。

「わ、わかったよ。逃げたりしないから」

逃げることに賢明でないことはわかった。すぐに追いかけてくるだろうし、ほかのホツキョクグマにやられる可能性もある。ところがまもなくして、ミルティーはぼくを外まで引きずり出した。

「閉じ込めたかと思えば、今度は追い出しか」

何をしたいのか、さっぱり見当がつかない。ぼくを連れて崖を下り始める。傾斜がきついので、気をつけないと海までまっさかさまだ。こわごわミルティーのあとに続く。それでも視界が開けている場所を歩くことで、救助隊に発見されればいいと願った。

ツンドラの大地は茶色がかった短い草で覆われ、高い木は一本もな

い。その中にピンクや黄色の小さな花がぽつぽつ咲いている。遠くの方に行列をなしたトナカイが見えた。はるか沖には鯨の群れが潮を吹いている。海面下にたくさんの魚がいるのだろう。それを目当てに海鳥達も集まる。彼らとつてこの島は、まさしく楽園なのかもしれない。海岸に出た。ひとときワカモメが群がっているところがあった。ミルティーはそこに向かっていく。見ると鯨の死骸が打ち上げられていた。死んでかなりの時間が経っているのか、皮膚はひびわれて乾燥した肉は黒い。チーズを腐らせたような悪臭が鼻につく。ミルティーは肉片を歯で引きちぎると、むしゃむしゃ食べ始めた。

「げっ、こんなの食べて平気かよ。食中毒起こすぞ」

内心、食中毒でも起こしてくれればいいと思った。満腹になると、また来た道に戻り始めた。

「鯨のおかげで今日は食べられなくて済んだな」

恐怖で忘れていたけれど、ぼくもおなかがすいていた。ツンドラに生えた草やベリーをむしって、むさぼるように食べた。おなかがふくれるほど食べたのは、何年ぶりだろう。あんなに嫌っていたベリーは格別の味だった。

ミルティーはそれから何度も海岸に出かけ、残った鯨の肉を思う存分食べた。ぼくを必ず連れて行き、食べている間も決して目を離さなかった。

ある日のことだ、海岸にほかのホツキョクグマが一頭現れた。ミルティーより二回りぐらい大きい。突然ものすごい速さでぼくに向かってきた。ミルティーはとっさに相手に飛びかかった。向こうも容赦なく殴りかかる。ミルティーの肩から血が出た。それでも必死に反撃する。ミルティーのパンチが顔に命中した。相手が目を押さえているすきに、ぼくらは大急ぎで洞窟に戻った。

血がにじんだミルティーを見て、不思議に思った。

「もしかして、命がけでぼくを守ってくれたのか？」

このときからミルティーに対する見方が変わり始めた。

夜がないと時間の感覚が狂って、一日が無性に長く感じる。ぼくは小石を積んで日時計を作った。そして海岸で拾った流木に傷をつけて、日にちも数えた。八月の中旬だというのに風が冷たい。太陽はだんだん高さを下げて、数時間は地平線の下に沈むようになった。下旬になるとわずかに雪が降った。夏がものすごいスピードで去っていく。

九月に入ると気温はいつそう下がり、夏から冬に急転直下したような感じになった。雪が降るたびに、あれだけいた鳥が姿を消していった。南に帰ったのだろう。

鯨を食べ尽くしたミルティーは、ほかの獲物を探して海岸を歩き回っ

た。海はまだ凍っていないので、ホツキヨクグマの好物であるアザラシは見かけない。休憩用の氷がないので、この時期は居場所を変えているのだろう。

代わりにセイウチの数が増えてきた。アザラシを十倍ぐらい大きくした海獣だ。長い牙を持っている。夏を北極で過ごし、寒くなるとまた南に戻る。ウランゲリ島はその途中の休憩場所だ。島の岬に固まって焼き芋みたいにゴロゴロ寝ている。いびきをかいたり体をかきむしったりして、迫力台なしだ。見ているとつい笑ってしまう。何百頭、いや何千頭はいるかもしれない。あれだけ固まるとお互いが邪魔だろう、と思ったら案の定だ。隣の牙が刺さったりして、ときどき小競り合いが起きる。

ミルティーは彼らをじつとながめるものの、なかなか手が出せない。ああ見えてもセイウチは、ホツキヨクグマの天敵と言われるくらい強

い。簡単には殺せない。

「やめとけ、下手に近づくとやられるぞ」

それでもミルティーは、じわじわとにじり寄る。それに気づいた彼らは、パニックを起こしたように海に飛び込んだ。体は大きいのに意外と気は小さい。大勢が一斉に飛び込むものだから、方々でぶつかり合う。そのあと岬には、圧死したセイウチが三頭横たわっていた。そばで見ていたミルティーはのっそりと近づくと、鋭い牙でその皮をはぎ取った。

セイウチには悪いけれど「棚からぼた餅」みたいな作戦だった。何も手を出さずに、一トンもある巨体を三頭も手に入れた。一度では食べ切れない量だ。臭いをかぎつけたのか、ほかのホツキョクグマが集まり始めた。親子連れもいる。ミルティーは気前良くみんなに分けた。

そういうわけで、一向にぼくを襲わないミルティーに、次第に気を許すようになっていた。それどころか親しみさえ感じた。ミルティーに「おはよう」「おやすみ」「ありがとう」と声をかける。そうするとつづらな瞳をぱちぱちさせて、返答してくれているような気がした。

毎日のように狩りにつき合っているせいか、ぼくも食料探しがうまくなってきた。ツンドラの植物や海岸に打ち上げられた海草以外にも、川の魚や崖から落下した鳥もごちそうになった。

島には食料以外にも、ちよつとしたアイデアと工夫で宝物になるものがゴロゴロしていた。トナカイやアザラシの毛皮を、鯨の筋で縫い合わせてコート、ブーツ、手袋を作った。布団もできた。草を編んで作ったタモは、川や入り江で岩魚を取るのに大活躍した。セイウチの長くて太い牙は、いろいろなものに使えた。ツルハシやモリ、容器、彫刻してお守りも作った。お金で何でも買える時代に、自分で考えて作る

ことは、大変でも楽しかった。それに家族に会えない寂しさを、わずかではあるけれど紛らわせてくれた。

日に日に夜が長くなる。初めてそれを目にしたとき、美しさで体がしびれた。オーロラだ。七色の光が天空をきらめき、盛り上がってはぼやけていく。空から降り注ぐ滝のようだ。うねったかと思えば、破裂しそうになるときもある。

十月になると、入り江から沖に向かって氷が張り始めた。鳥はほとんど南へ飛び立った。残っているのは、白い羽根に変化した雷鳥ぐらいだ。

ミルティーの毛色も少し変わってきた。下の方から白くてきれいな毛が生え始めている。気づくとキツネもウサギもみんな白くなっている。体が自然に冬支度をしている、考えてみればすごいことだ。



海岸にいるホッキョクグマの数が増えてきた。セイウチを追ってどこからか来たのだろう。動物が移動するのは生きるためだ。えさのあるところを集まる。そのせいかこれだけ寒いのにみんな元気だ。体を雪になすりつけて転げまわったり、ボクシングをしたりして遊んでいる。五日間大雪が降った。風向きのせいか、洞窟周辺は雪の吹きだまり場所となった。雪が中まで入ってくるので、穴が狭くなって困る。それに寒くてたまらない。息をするたびにまつ毛やまゆ毛が凍る。このころからミルティーは洞窟付近で何やら探し物を始めた。

「なんだ、おいしいものでも埋まってるのか？」

数日かけて周囲を探索したあと、吹きだまりの一角を猛烈な勢いで掘り始めた。前足をシャベル代わりにし、掘った雪は斜面に落として、三日間休みもせずに穴を掘った。作業が終わると、首を後ろから前に大きく振った。ぼくを呼ぶときのしぐさだ。おそろおそろ中に入った。

トンネルを三メートルぐらいじわじわと前進する。

驚いた。狭いトンネルからは考えられないほど、奥は広い空洞になっていた。今までの洞窟の五倍ぐらいある。雪で囲まれているかまくらみみたいだ。

「ひょっとしてこれ新居か？　すごいな、建築家になれる」

出来ばえの良さに、すっかり感心してしまった。そして早速この巣穴に住まいを変えることになった。風も雪もよけられるし、結構暖かい。ミルティーがせつせと冬支度をするのに負けまいと、ぼくも準備を始めた。このまま太陽が沈むと、暗闇と寒さで外に出られなくなる。今のうちと思い、外出のたびに保存用の食料を持ち帰るようになった。セイウチの肉片、魚、鳥、ねずみ、海草、木の実、野草。それ以外にも道具になりそうなものを運んで、越冬に備えた。

それでもまだ大事なものが足りなかった。明かりだ。何も見えなく

なると道具を作ることができない。想像を絶するような退屈だけが待つだろう。考えてあぐねていると、ふっと昔やった理科の実験が頭に浮かんだ。

「うーん、本当にうまくいくかなあ」

ぼくは近くで氷を切り出してくると、それで洗面器ぐらいの大きさの虫眼鏡を作った。真ん中が厚くなるように、セイウチの皮でこすつてカーブをつけた。次にそれを太陽に向けて傾け、その先に綿花を置いた。太陽光を集めて待つこと一時間。あきらめかけたとき、綿花がらむくむくと白い煙が上がった。

「やったあ、成功だ！」

煙はあつという間に赤い炎に変わった。貴重な火を絶やさないように、あらかじめ用意したランプに移した。石の小皿にセイウチの脂とコケの芯を入れて作ったものだ。細々と揺れる炎は、手元を照らすの

には充分だった。

「ミルティー、これ部屋に置いてもいいか」

もし火を嫌がったら、消してしまおうと思った。退屈もぼくさえがまんすれば済むことだ。ミルティーは火を不思議そうにながめ、少し後ずさりをした。再び近づいて臭いをかぐと、もう興味がないという感じで気にも留めなかった。ぼくはランプを巣穴に置かせてもらうことにした。

十一月になった。太陽は水平線のすぐ上に、数時間顔を出すだけになった。白と灰色しかない世界を、紫がかったピンク色にほんのり染める。それは美しさと共に、過酷な冬の到来を示していた。

海岸ではまだセイウチをあさっているホツキョクグマが大勢いる。でもミルティーはとうとう一步も外に出なくなった。ぼくとしてはあ

りがたかった。こう寒いと外に出た瞬間凍りついてしまいそうだし、ミルティー一人に出かけられても不安だ。

まもなく猛烈な吹雪がやってきた。雪がたちどころに巣穴の入口をふさぐ。ミルティーは何度もそこに行つては、直径十センチぐらいの小さな穴を確保した。呼吸穴だ。この穴がないと酸素不足で死んでしまう。

外の様子はその小さな穴からのみ知ることとなった。嵐がやんでも、もれる光が日ごとに弱まり、ついには闇に包まれた。穴からは北斗七星が見えた。北極星のまわりを一日一周している。日時計の代わりにその動きを見て、カレンダーをつけることにした。

ランプの光を頼りに、早速道具作りに取りかかった。まずはほつれかけたコート、ブーツ、手袋の補修だ。そのあと予備用に同じものをもう一つずつ作る。そのほか動物の骨や皮で、お守りや人形も作ろう

と思う。

あと冬ごもり中にどうしても完成させたいものがあつた。スキーとそりだ。春になって外出するときのためだ。ミルティーはかんじきみたいな大きな足裏を持っているからいい。でもぼくの場合は足がすっぽり雪に入ってしまう。荷物を持ったりすれば、まともに前に進めない。スキーは簡単にできそうだった。問題はそりだ。流木をアザラシの皮で作ったヒモで結わいて組む予定だ。でも頑丈でなければいけない。時間がたつぷりあるので、コツコツ完成させようと思った。

ミルティーは一週間前から巣穴の中に、もう一つシェルターみたいな穴を掘っている。何の目的かはわからない。もしかしたらぼくの作業がうるさくて、気に障るのかもしれない。できるだけ音をたてないように気をつけることにした。

### 三

大砲のような音が聞こえた。海岸が氷のぶつかり合っているのだらう。吹雪のたびに雪がギシギシ鳴る。オオカミの遠吠えも聞こえた。静寂がいろんな音を運んでくる。それなのに船やヘリコプターの音は、何日待っても届けてはくれなかった。もうすぐクリスマスだ。イルミネーションに彩られた清水港が目に見えなくなる。

ミルティーが急にソワソワし始め、ぼくを避けるようになった。そして掘ったばかりの新しい穴にこもってしまった。病気なのかと心配してのぞこうとすると、ウーウーうなつて威嚇する。嫌われたのかとも思っただけで、どうしていいのかわからない。

「ミルティーは冬眠を決め込んだのかもしれない」

そう思うことにして離れて生活したものの、さびしくて仕方がない。ミルティーは穴から出ようともしなかった。

数日後のことだ。キューキューと聞き慣れない泣き声がした。ミルティーの方から聞こえてくる。ほかに来客があるはずもなかった。

そつと様子をうかがいに行つた。ランプの光に浮かび上がった光景を見たぼくは、ひっくり返りそうになるほど驚いた。モルモットのよな動物が二匹いた。短い毛がまばらに生えているだけで、目も開いていない。子猫ぐらいの大きさだ。ミルティーのおなかに寄り添って乳を吸っている。

「えつ、うそだろ。ミルティー子供を産んだのか？」

これですべての謎が解けた。ミルティーが早くから巣穴にこもつたこと、最近ぼくを寄せつけなかったこと。あと今さらという感じだけれど、ミルティーがメスだったということ。ほかのホツキヨクグマよ

り体が小さくて、やけに温厚な性格だとは思っていた。

ミルティーが目を覚ました。

「ごめんごめん、邪魔しに来たんじゃないから心配しないで」

出産時のホッキョクグマが、とても神経質なのは知っていた。子供が敵から襲われないように、また寒さで死なないように常に気を配っているからだ。ミルティーが自分の意思で出てくるまで、ぼくは気長に待つことにした。遠くから新しい命の誕生を盛大に祝った。

年が明けた。本当ならじいちゃんの家に行って、新年を祝っているところだ。ここに来て、家族のことを思わない日は一日としてない。でもその悲しみを、ミルティー達の存在が和らげてくれていた。

ひんぱんに襲う雪嵐が、いちいち呼吸穴をふさぐので管理が大変だ。外はマイナス四十度ぐらいあるだろう。それに比べたら、巣穴は暖か

くて天国みたいだ。

赤ん坊が生まれて一カ月が経った。ミルティーにべったり甘えてくるに違いない。キューキュー泣く声がしょっちゅう聞こえてくる。

就寝中のことだった。ほおのあたりがかゆくて目が覚めた。子犬のような動物が、ふわふわした白い手でぼくの顔を突いている。あのねずみみたいだったミルティーの赤ん坊だ。うそみたいに成長が早い。

ミルティーが心配そうにこちらにやって来た。赤ん坊をくわえると再び穴に戻る。そのときぼくをチラッと見て、首を後ろから前に大きく振った。ぼくを招いている。ミルティーのあとについて行つた。

双子は母親のそばを離れたせいか、わなわな震えていた。ミルティーがなめたり息を吹きかけたりして温める。

「待てよ。船から落ちた日、ぼくにもそうしてくれたよな」

四カ月前のことを思い出して、目頭が熱くなった。

翌日からみんなのそばに行くようになった。双子を自分の兄弟のよう  
に思い、名前までつけた。比較的よく動く方をコロ、少し大人しい  
方をマルにした。コロコロ動いて、ぬいぐるみのようにふんわりして  
丸いからだ。

「お前ら本当に地上最大の肉食獣かよ、可愛い過ぎるぞ」

双子を見るたび、目を細めずにはいられなかった。まだ這うことし  
かできないけれど、すこぶる元気がいい。ミルティーのおなかや背中  
をずり落ちながら遊ぶ。うっかり下に落ちるとキーキー鳴く。ミル  
ティーはすかさず大きな手ですくって、自分の胸の中に戻す。

おなかですくとミルクをねだった。ミルティーは壁にもたれて尻を  
ついて座り、双子を後ろ足の間にすえて胸に押しつける。慈愛に満ち  
た表情がなんとも言えない。気品と威厳すら感じる。双子は乳首に飛  
びついて、ミルクをコクコク飲む。そして満腹になるとすぐに寝る。

「なんて幸せなやつらだ」

うらやましいくらいだった。ミルクのおかげで、コロとマルはみるみる成長した。体重は多分十キロぐらいになっただろう、身長も立ち上がると一メートルはある。歯や爪も生えてきた。むき出しの唇の上にも毛がかぶさって、だんだんホッキョクグマらしくなってきた。

生後二カ月になると、歩けるようになった。黒いビー玉のような目をくりくりと輝かせながら、巣穴の中を歩きまわる。ミルティーとぼくの間を行ったり来たりするので、なかなか眠れない。

「すっかりいい遊び相手になっちゃったな」

そう言いながらも、ぼくはうれしさを隠せない。

一方、ミルティーがどんどんやせてきた。それもそのはずで、冬ごもりをしてから三カ月間何も食べていない。自分の皮下脂肪で栄養を補っているのだ。ぼくの食料まで取る気がないのか、貯蔵庫の肉を何

度差し出しても口にしない。いくら食べだめができるとはいえ、皮下脂肪もいつかは底を尽きるだろう。動作が鈍くなつて元気がない。早く春が来て狩りに出かけないと、ミルティーが死んでしまう。

数日前から続いていた嵐がぴたとやみ、静けさが訪れた。呼吸穴からぼんやりとした光がもれている。最初は月の明かりかと思った。それにしては赤味がかっている。呼吸穴を広げて、顔だけ出してみた。その光景に思わず目をしばたいた。線香花火の玉のようなものが、水平線から顔をのぞかせている。

「た、た、太陽だ！ もうすぐ春が来る」

感動のあまり涙が出た。わずかな光が、全身にみなぎるほどの希望を与えた。あと少し辛抱すれば、外に出て狩りができる。元気が出れ

ば希望もふくらむ。

呼吸穴にたまる雪が、じめつとしてきた。いく分寒さが和らいでいる。穴から忍び込む太陽の光が日ごとに強くなり、春の接近を予告している。

「あと何日待ったらいいんだろう」

待ち切れなくて体がうずうずする。二月はまだ風が強い。呼吸穴をふさぐ回数で、その激しさがわかる。下手に外に出れば雪に埋もれて死ぬ。判断はミルティーに任せるしかない。外に出てもいい時期を知っているはずだ。

コロとマルはぐんぐん大きくなる。もう大型犬ぐらいだ。とにかくじつとしていない。ミルティーやぼくの体を上ったり下りたり、壁にトンネルを掘ってみたり。寝るとき以外は、いつもちよこちよこ動い

ている。レスリングも覚えた。押したりかみ合ったりしてふざける。大抵はコロの方が優勢だ。

ミルティーはますますやせてきた。体力が衰えているので、動くのが辛そうだ。それでも最近、呼吸穴をひんぱんにのぞくようになった。臭いをかいだりして、外の様子をうかがっている。

とうとうミルティーが入口の雪を取り払い始めた。外に出ても安全だと判断したのだろう。でも半年前に巣穴を掘ったときの力はもうない。穴を開けるだけで息切れしている。

「ミルティー無理すんな、ぼくが代わるから」

全力で雪をかきわけた。穴が広がるたびに、まぶしい光がさんさんと差し込む。ミルティーが穴から顔を出した。周囲を注意深く見まわしたあと、重い体を外に出す。ぼくもミルティーのあとに続いた。

「うわあ、すごいや！」

そこは白一色の世界だった。視界いっぱい、片栗粉をまぶしたような雪景色が広がる。ずっと暗いところにいたから目が慣れない。ミルティーもしきりに目をぱちぱちさせている。そしてまだ穴の中にいるコロとマルを呼んだ。彼らにとつては、初めて浴びる光と冷たい空気のシャワーだ。怖がってなかなか外に出ようとしない。それでもミルティーがフウフウ息をかけて急かすと、ようやくおっかなびつくりしながら出てきた。

奇妙な光景に圧倒されたに違いない。双子はミルティーの足元に隠れて離れない。ミルティーが歩き出すと、おぼつかない足どりでくつついて行く。ぼくもスキーを履いて、それに続いた。

小高い丘まで来ると、そこで休憩した。太陽の光が、ミルティーを黄金色に輝かせている。視線を移せば、綿菓子のようなコートをまとったキツネやウサギもいる。みんな無駄な体力を使わないように、じつ

としている。ゆつたりとして美しい時間が流れ、絵本の中にいるような錯覚におちいった。

ミルティーは宝探しでもするかのように、地面をかき始めた。雪の下から出てきたものは、天然の冷凍室に置かれたままの草や木の実だった。半年ぶりの食事だ。空腹をいやすかのように、むしゃむしゃ食べる。二十分ほどして巣穴に戻った。こうして最初の外出が終わった。

こんな風にして数日間散歩を繰り返した。するとコロとマルが慣れてきて、元気に遊ぶようになった。丘に登って転げまわり、わざと滑り落ちてはまた登る。追いかけてっこ、かくれんぼ、何をやっても楽しくてたまらない様子だ。一緒に遊ぼうとせがまれても、ミルティーはだるそうに横たわる。やれやれと思いつながら、ぼくがつき合う。

遊び疲れておなかがすくと、ミルクを吸いに行く。ミルティーはどんなに疲れていても、抱き寄せて授乳する。それは一日六回以上に及ぶ。

ホツキヨクグマの子供は生後十八カ月間母乳で育つ。その間成長に必要な栄養は、すべて母親の体からもたらされる。草や木の実だけでは、乳が思うように出ないだろう。もっと栄養のある獲物を探しに行かななくてはならない。

毎日の散歩は、その予行演習のような感じだった。だんだん遠くまで行けるようになった。歩く速度も次第に速くなる。ぼくはいつ何があってもいいように、荷物を積んだそりをひいて出かけるようになった。

コロとマルがだんだん体力をつけてくると、ミルティーは何かを決断したようだった。そしてついに巣穴に別れを告げた。

## 四

巢穴を離れて三週間が経った。故郷では桜が満開のころだ。鳥が少しずつ戻ってきた。みぞれまじりの雨が降ったかと思えば、吹雪になる日もあつて、こちらの春は何度も出直した。

ぼくらは食べ物を求めて、氷原を旅していた。降ったばかりの雪に、ミルティーが大きな足跡をつける。双子とぼくはその跡をたどるように、一列につながる。

割れた氷が押し寄せ合い、重なって山を作る。そんなところはアザラシの呼吸穴が多い。ミルティーが臭いをかぎながら、氷の山脈に沿って歩く。うっかり割れ目に落ちたら大変だ。足元に注意しながら慎重にそりを引く。

獲物はなかなか見つからなかった。ミルティーはフラフラだ。それなのにぼくらの体調をいつも気にしてくれた。疲れると鼻で押ししてくれたり、双子を背中に乗せて歩いたりすることもあった。

五百メートルぐらい歩いては休憩した。そのたびにミルティーは氷山の尾根に登って、あたりを偵察した。氷原には飢えたオスのホッキョクグマがいる。オス熊は育児に関わらないどころか、小熊を獲物と見なして狙う。

またこの時期はホッキョクグマのお見合いがさかんだ。オスがメスを追いかけたり、オス同士で決闘したりする。ミルティーもオス熊につけられたことがある。そのときは急ぎ足で遠ざかった。ほかにもオオカミやセイウチなど、氷原には危険がいっぱいだ。ミルティーがどれほど神経をとがらせて歩いているかがよくわかる。

トナカイの群れにも会った。鋭い角で氷を打ちくだき、凍った草を

掘り起こして食べていた。秋はおながもたれるくらい太っていたのに、すっかりやせている。みんな苦しい時期をなんとか乗り越えようと必死だ。ここにいる動物は、いつだって生きることと真剣だ。

ときどき視界がなくなるほどの恐ろしい地吹雪にあった。ミルティーは大きな岩かけを見つけて穴を掘り、みんなで丸く固まって寝た。嵐はすぐ終わることもあれば、数日間続くこともある。やむと毛にこびりついた雪を振るって、雪面に刻まれた美しい風紋の上を再び歩き始めた。

四月の下旬、ついに島を取り巻く氷原の端に到着した。水面から蒸気が昇って雲ができている。沖から押されてきた浮氷が、ジグソーパズルのピースのように散乱していた。こすれあってギーギー音をたてている。

「ミルティー！　今アザラシが顔を出したぞ」

そう叫んだ瞬間、海の中にすりと逃げられた。水中にいるアザラシは定期的に呼吸穴から顔を出したり、浮氷の上で休んだりする。でもホツキョクグマに襲われないように常に警戒している。ミルティーは辛抱強く次の機会を待った。ぼくらは邪魔にならないように、氷山のかげに身をひそめた。

アザラシが再び呼吸穴から顔を上げた。ミルティーは腹ばいになって、氷の上を蛇のようにそろりそろりと進む。タイミングが整うと立ち上がって、あらん限りの力で氷をぶち破る。けれども空振りが多くてなかなか成功しない。

八回目のチャレンジだった。ミルティーはとうとうアザラシを穴から引きずりだした。そして氷の上で一撃をくわえ、あつと言う間にたいらげた。

元氣を取り戻したミルティーは、その後一週間ぐらい何も食べずに済んだ。まだ肉に興味がない双子は、たくさん出るようになったミルクをコクコク飲む。おかげでぼくとあまり変わらない体格になった。

北極星は一年中真北に位置して、動くことがない。だから方角を知るための目印にもなる。風が浮氷を北西へと押し流しているのがわかる。ホッキョクグマの狩りが氷に左右されるというのは本当だ。張り過ぎてても薄くなり過ぎてても成功しない。ホッキョクグマの経験と判断力がものをいう。ミルティーは流れる氷に歩調を合わせるように、北西へ進んだ。

太陽が島を暖めだした。あちこちに水たまりができて危険この上ない。コロとマルは泳ぎを覚えた。だからもう水に落ちても平気だ。それ以外にもミルティーのやることをいちいち真似て学ぶ。海草や鳥を

取ることまでできるようになった。ミルティーから日々生きる方法を教えてもらっている。

一方ぼくだけがやっかいな荷物になった。暖かくなつたとは言え、水に落ちたら体温が下がって死ぬ。慎重に歩くとどうしてもみんなに遅れる。でもミルティーは決してぼくを置いてきぼりにはしなかった。水路を渡るときには、ぼくを氷の上に乗せて鼻で押してくれた。うっかりそりが沈みそうになると、くわえて引っぱりあげてくれた。

途中、親子連れのホツキョクグマに会った。一頭の子供は結構大きい。様子が変なのでしばらく見ていた。母熊が子供を威嚇して、遠くへ追いやろうとしている。ホツキョクグマは生後一年半ぐらいで親離れする。きっと彼らも独り立ちする時期が来たのだらう。ミルティーがコロとマルにいろいろなことを教えるのも、いつか来るこの日のためだろう。

## 五

空は抜けるような青さだ。たくさん鳥たちが戻り、大空を優雅にかけている。ミルティーのアザラシ狩りは好調だった。

「栄養補給もできたし、そろそろウランゲリ島へ帰らないか」

もうこれ以上遠くに行つて欲しくなかった。初夏の太陽が氷原をシャーベット状に崩していく。このままではウランゲリ島にさえ戻れなくなる。けれどもミルティーは、まだ北西に進路を取っていた。なぜそこまでして前進するのか、理由がわからない。気が変わるのを待つしかなかった。

風の強い日、何気なく星を見ていて気がついた。ぼくらは何もしたくても勝手に潮に流されている。昔父さんが話してくれた、ナンセン

というノルウェーの探検家の話を思い出した。

「ナンセンは北極海を北西に流れる強い海流があることを、自分で試して証明したんだ。フラム号という船を出して、ロシアの北でわざと氷に閉じ込めた。船は三年近く氷と共に漂流して、ノルウェーの北にあるスピッツベルゲン島に着いた」

この話が本当だとすると、ぼくらはヨーロッパの方に流されていることになる。でもミルテイーが潮の流れに捕まったのか、それとも自分の意思で移動しているのかは、わからなかった。

風が浮氷をさらに遠くへ吹き去る。ぼくらはわずかに残った氷塊の上に取り残されていた。目の前に大きな海面が開いている。

何を思ったのか、突然ミルテイーがぼくの首元をくわえ、力ずくで小さな浮氷に移した。双子は元いた氷塊に残したままだ。ついてきそう

になるのを威嚇して止めている。

「な、何だよいきなり！」

すると今度は水に入り、泳ぎながらぼくを乗せた氷を押し始めた。氷は海流とミルティーが押す力で、北西にぐんぐん進み出した。ミルティーに初めて出会った日のことを思い起こした。あるときもこうやって、ぼくを氷に乗せて運んだ。

「おい、今度はどこに連れて行くんだよ」

ミルティーの不可解な行動にとまどうばかりで、どうすることもできない。

二日が過ぎた。その間ミルティーは氷を押しながら泳ぎ続けた。それもかなりのスピードだ。九日間で七百キロ近くを泳いだホツキヨクグマの話聞いたことがあるけれど、それに負けていない。すごい持久力だ。

照りつける太陽が、氷をじりじり小さくしていく。まわりは見渡す限り水面だ。ウランゲリ島からはますます遠ざかっている。もちろん日本からもだ。にわかにわいた不信感が、ついに怒りに変わった。

「今さら海に放り出すんだったら、どうしてもっと早く殺してくれなかったんだ」

でもミルティーを恨んだところで仕方がなかった。今度こそ本当に死ぬのだと思った。すべてをあきらめかけたときだった。目の前に水蒸気のかたまりのようなものが見えた。最初は雲かと思った。近づくにつれ、それが何なのかはつきりした。

「陸地だ！　陸地が見える」

それは夢でも幻でもなかった。紛れもなく水平線に広がる島だった。どんどん近づいている。海岸べりにマッチ箱のような小屋が見えた。煙突から煙が出ている。屋根の上には旗がひるがえっていた。

「人がいるんだ」

絶望が体温を奪い、希望がそれを取り戻すというのは本当だ。うれしさのあまり冷えた体が急激に熱くなった。

まもなく氷は岸に到着した。疲れきったミルティーが砂浜に寝転がる。でも呼吸が落ち着くと、すぐにあたりを警戒し始めた。そしてぼくを凝視したかと思うと、いきなり鼻で突き飛ばした。離れろと言う合図だ。近寄ろうとすると、ウーと低くうなつて威嚇する。

先日出会った親子熊のことを思い出した。自立する時期が来ると、母熊は子供を厳しく突き放す。子熊はその試練を乗り越えて、自分自身で強く生きていくようになる。

ミルティーは長年の経験や鋭い感覚で、わかっていたのかもしれない。北極を取り巻く海流や地理、またこの島に人間がいるということ。そして危険を承知で、敢えてぼくをこの島へ送り届けた。ミルティー

はいつだつてそうだった。胸の中に確かなコンパスを持っていて、行くべき方角を間違わなかった。ぼくはミルティイーを疑ったことを、心から恥じた。

それと同時に、ミルティイーのことがひどく心配になった。これから気の遠くなるような距離を泳いで、コロとマルのところに帰るのだろう。生きて戻れるのだろうか。ぼくらを後押しした海流の向きが、今度は逆に変わればいいと祈った。

別れを惜しんでいる暇はなかった。まごまごしてぼくと一緒のところを人間に見られると、ミルティイーが殺される。

「わかった、行くよ。今まで本当にありがとう」

ミルティイーは方向を見失いかけていたぼくに勇気を与え、生きることの尊さを教えてくれた。命と一緒に大事なものをくれたミルティイーにお礼を言つて、別れを告げた。ミルティイーは背を向けると、一度も

振りかえずにぼくから去って行った。

ぼくは一人になった。疲れていたけれど、集落までの道を力強く歩き始めた。まもなく島の人に助けられた。ここはノルウェーの北にあるスピッツベルゲン島、そうあのフラム号もたどりついた島だった。ミルテイーのコンパスは一メートルメートルの狂いもなく、ぼくを安全な場所に導いた。

「海斗、海斗、起きなさい！　ウランゲリ島に着いたわよ」

母さんの声ではっと目が覚めた。

「えっ、ここはどこ？」

「何寝ぼけてるの？　船の中よ」

そうだった。ぼくは船室でDVDを見ながら寝てしまった。

「母さん、あのさあ……今までいろいろごめん」

「何よ、急に。まだ寝ぼけてるのね。寝言でも同じこと言ってたわよ」

母さんは照れくさそうに微笑み返した。

甲板に出た。目の前に大きな鯨のようなウランゲリ島が横たわっている。とつさに断崖に目をやった。血まなこになって洞窟を探した。けれどもどこにも見当たらなかった。目に入るのは、たむろしたウミガラスばかりだった。

それから五十年の月日が流れた。地球は再び寒冷化し、北極海がまた厚い氷に閉ざされた。ウランゲリ島は人間を簡単に寄せつけない、野生動物たちの聖域に戻った。北極海航路の開拓で、新ビジネスをもくろんでいた青井海運には大打撃となった。じいちゃんが生きていた

ら、さぞがっかりしたことだろう。でも正直ほつとしている。生物を取り巻く環境が、永遠に脅かされることがないように願ってやまない。じいちゃんの跡を継いで社長になったぼくは、何度も苦しい試練を強いられた。倒産しそうになったこともある。そのときは副社長の平木雄太、そう小学校の同級生だったあの平太が、縁の下の力持ちのように手助けしてくれた。

年をとったせいか、記憶がだんだんと頭から消え去る。それでもあの日に見たミルティーの夢は、かたときも忘れない。いつのころからか、ミルティーと母さんの面影が重なるようになった。そんな母さんも、今はもういない。

人生には楽しいことも辛いこともある。方向を見失って迷うことだつてある。ぼくはミルティーがくれたコンパスを胸に秘めながら、今を一生懸命生きている。

完

「参考文献」

・トマス・J・コツホ 日本語訳 喜多元子（一九九〇）『北極グマの四季』財団法人 法政大学出版局 百七十六P P

・トリア・ラーセン シュビレ・カラス 日本語訳 内藤靖彦（一九九四）『ホッキョクグマ』くもん出版 六十P P

・福田俊司（二〇〇二）『ホッキョクグマの王国』文一総合出版 百三十二P P

・佐藤秀明（一九八九）『北極』情報センター出版局 百二十六P P

・アーネスト・バーチ, Jr 日本語訳 スチュアート・ヘンリ（一九九一）『図説 エスキモーの民族誌』原書房 三百十PP

「参考文献URL」

参考:「ウランゲリ島」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版より』  
<<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%83%E3%82%B2%E3%83%AA%E5%B3%B6>> (2015/7/30 アクセス)

## ^ 作者紹介 v

一九六四年

静岡県静岡市生まれ

一九八六年

日本大学経済学部卒業

二〇〇九年

「第二十一回 日本動物児童文学賞」奨励賞受賞

（作品名…ホツキョクグマと三角コーン）

二〇一二年

「第二十四回 日本動物児童文学賞」奨励賞受賞

（作品名…ロッキーとクリーム）

二〇一二年

「平成二十四年度 静岡市民文芸児童文学部門」奨励賞

受賞（作品名…月のおくりもの）

二〇一四年

「第二十六回 日本動物児童文学賞」奨励賞受賞

（作品名…ミルティーがくれたコンパス）

二〇一四年

「平成二十六年 度 静岡市民文芸 児童文学部門」

市長賞受賞（作品名…メガマウスのジョー）

二〇一五年

英会話学校の非常勤講師に就任

書名…『ミルティーがくれたコンパス』

著者名…芦沢 美樹／作・絵

製作日…二〇一五年七月三十日

発行者…芦沢 美樹

製作者…芦沢 美樹

email: [info@sankakucone.com](mailto:info@sankakucone.com)

Copyright(C) 2015 Miki Ashizawa All rights reserved

